

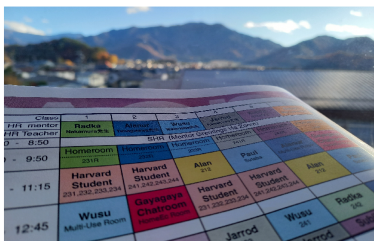
須坂高校新聞

英語漬けの3日間

Suzaka Academic Challenge 開催！

11月24日(水)から26日(金)の3日間、1年生を対象にSAC(Suzaka Academic Challenge)が行われた。

2年生は昨年のSACを覚えているだろうか。このイベントは今の2年生から始まっており、今年で2回目となる。そのため、3年生は参加していないので、内容を知らない人がほとんどと思う。SACとは、英語コミュニケーション能力とグローバルな視点でクリティ



クラスごとのスケジュール

令和3年度
12月号
委員会
新聞

カルに考える力を高めるため、外国人講師によるワークショップをクラスごとに行う英語漬けの3日間のことである。また、ハーバード大学生とのオンライントークセッションも行われる。毎年11月に行われ、1年生が参加する。日本在住の6カ国の講師の方を須坂高校に招き、米国在住の講師の方はリモートでの参加となった。

各クラス担当講師による「3」から1日が始まった。ワークショップでは、講師によって異なる企画・セッションが行われ、各国の考え方や文化、社会問題など、どれも考えさせられる内容であった。昨年と講師が変わっていたり、昨年から来ている講師でもワークショップの内容が違ったりしているため、もう一度2

年生が参加しても楽しめそうだった。また、「本物の発音」に直接触れる機会であったため、苦手になりがちな「聞く・話す」のスキルを本格的に学ぶことができ、英語で話して伝わることの嬉しさや楽しさがよくわかったと言っている人が多かった。今回のSACで印象に残ったことは、真剣に取り組む中でも楽しい雰囲気

が漂っていたことだ。「6〜7人のグループに1人の講師でいろんな話をする『ガヤガヤチャットルーム』がとても楽しかったです。」と1年の与田翔太さんは声を弾ませた。「世界の難民危機」や「自由民主主義の中の市民権」といったテーマでも、講師がゲームを交えて進めていたことで楽しい雰囲気が作り出されていた。また、言語の理解も大切だが、それ以上に、伝えたいという気持ち

が最も大切であると感じた。「自分の言葉がうまく伝わらなくても、伝

えようとすると気持ちがあれば、ジェスチャーや単語だけでも伝わることをわかりました。」と1年の男子生徒は言う。彼だけでなく、SAC中には、伝わりなくとも友達に聞いたり、単語を調べたりと意欲的に取り組む姿がとても多く見られた。

このようなイベントを学年全体(240人規模)で行っているのは全国的に見ても須坂高校だけだそう。来年もSACを実施する予定でいる。SACについての詳しいことは英語科の室井先生まで。(文責：山崎・小原)



パスタを高くまで積んでいる生徒たち(ジャポのワークショップ)

遠く離れていても心は通じる

姉妹校締結二周年！

11月12日(水)に、羅東高校・須坂高校 姉妹校締結二周年記念オンライン式典(以下オンライン式典)が行われた。

須坂高校の姉妹校である台湾の羅東高校とのオンライン交流は、海外で一番身近な存在である姉妹校から他国の現状を知り、国際感覚を養うために行われており、月に1回開催されている。今回はオンライン式典ということで、このような状況下でも、姉妹校締結二周年を祝うことができ、また、両校のこの2年間の歩みを振り返るために行われた。須坂高校の台湾文化・言語研究会の生徒14名が中国語で式典の進行をし、両校のビデオメッセージ交換や書道部によるライブパフォーマンスが行われた。須坂高校のビデオメッセージの内容は、学校紹介や吹奏楽部による交流感謝演奏披露であった。羅東高校からのビデオメッセージは、同じく学校紹介や演奏披露、またスイーツ研

究クラブによるパイナツプルケーキの作り方など、明るく元気をもらえる内容であった。

今回のオンライン式典を取材して1番伝えたいことは、このような状況下だからこそ、対面交流が叶う時まで、両校の繋がりが途切れないように、姉妹校の絆をオンラインで深めることが重要であるということだ。「実際に会うとなると、お金や時間もかかり、年に1回が限界でした。しかしオンラインであれば、実際に会うよりも手軽にでき、年に何回も交流することが可能となりました。コロナ禍で気がかされたことは多いです。」と原先生は言う。年に何回も交流することが可能となったオンラインが主流の今だからこそ、姉妹校の絆はコロナ前より強くなっているのではないかと。また、台湾文化・言語研究会の伊藤みりさんは「中国語が伝わるか不安でしたが、拍手で反応をして下さったので嬉



ライブパフォーマンスをする書道部の皆さん

しかった。実際には、実際に会うわけではないけれど近くにいるように感じました。」と言う。彼女が言う通り、そこには実際にお互いがあるように感じられるようなあたたかい雰囲気があり、オンラインだからと言って壁を感じることには無かった。

実際に対面が可能になったとしても、オンラインの交流を続けていくそう。また直近のオンライン交流会では一部の2年生が探究の発表を英語で行った。今後は1月に羅東生徒を須坂高校の理系講座の授業に招待する予定だ。今回のオンライン式典や今後のオンライン交流会の活動、台湾文化・言語研究会に関することは英語科の原先生まで。(文責：森・山本)